

【臨床・研究】

島根県東部圏域における COVID-19
新興後に生じた乳幼児 RSV 感染症の
免疫負債とその返済

なり 成 あい 相 あき 昭 よし 吉

キーワード：COVID-19，乳幼児 RS ウイルス感染症，下気道炎，
非医薬的感染予防策，免疫負債

要 旨

COVID-19新興後に取り組んだ非医薬的感染予防策（NPI）の励行と緩和が，島根県東部圏域における乳幼児RSウイルス（RSV）感染症に与えた影響を，PCR で RSV が単独で検出された松江赤十字病院小児科入院下気道炎58例を対象に検討した。

2020年10月から2023年4月までを1期，5類移行後の2023年5月から同10月までを2期，同11月から2024年10月までを3期，RSV 流行期は2か月連続して入院を認めた期間とし，月齢および臨床診断を比較した。

1期・2期・3期の順に，流行期は2021年6～9月と2022年3～9月・2023年5～9月・2024年6～9月，RSV 単独検出下気道炎例数は32・16・10例であった。

月齢中央値は2期に1期の2か月から14か月へと上昇，3期には2か月に復していた。また，2期には細気管支炎が減少，肺炎・気管支喘息急性増悪・気管支炎が増加したが，3期には細気管支炎が再び増加した。

島根県東部圏域の RSV 未感染幼児の免疫負債は，NPI が緩和された直後の2023年流行期に返済された。

は じ め に

RS ウイルス（respiratory syncytial virus，

以下RSV）には1歳までに75%が，2歳までに95%が初感染したあと幼児期に複数回感染する¹⁾。2回目以降の感染の症状は初回より軽く，下気道炎も減る¹⁾。この下気道炎を形作るのはサイトカインストームで²⁾，下気道狭窄を生じる細気管支炎と気管支喘息急性増悪では病理が異なり³⁾，細気管支炎は12か月齢未満の乳児の初感染病態である⁴⁾。

Akiyoshi NARIAI

安来市医師会診療所

松江赤十字病院感染症科

松江赤十字病院小児科

横浜市立大学小児科

連絡先：〒692-0206 安来市伯太町安田1700番地

安来市医師会診療所